憲法發布大典賬

清水義郎編輯

全

ヲ 6
4298

門 ラ6
昭 4298
巻

明治銅刻繪入小說

金壽堂藏

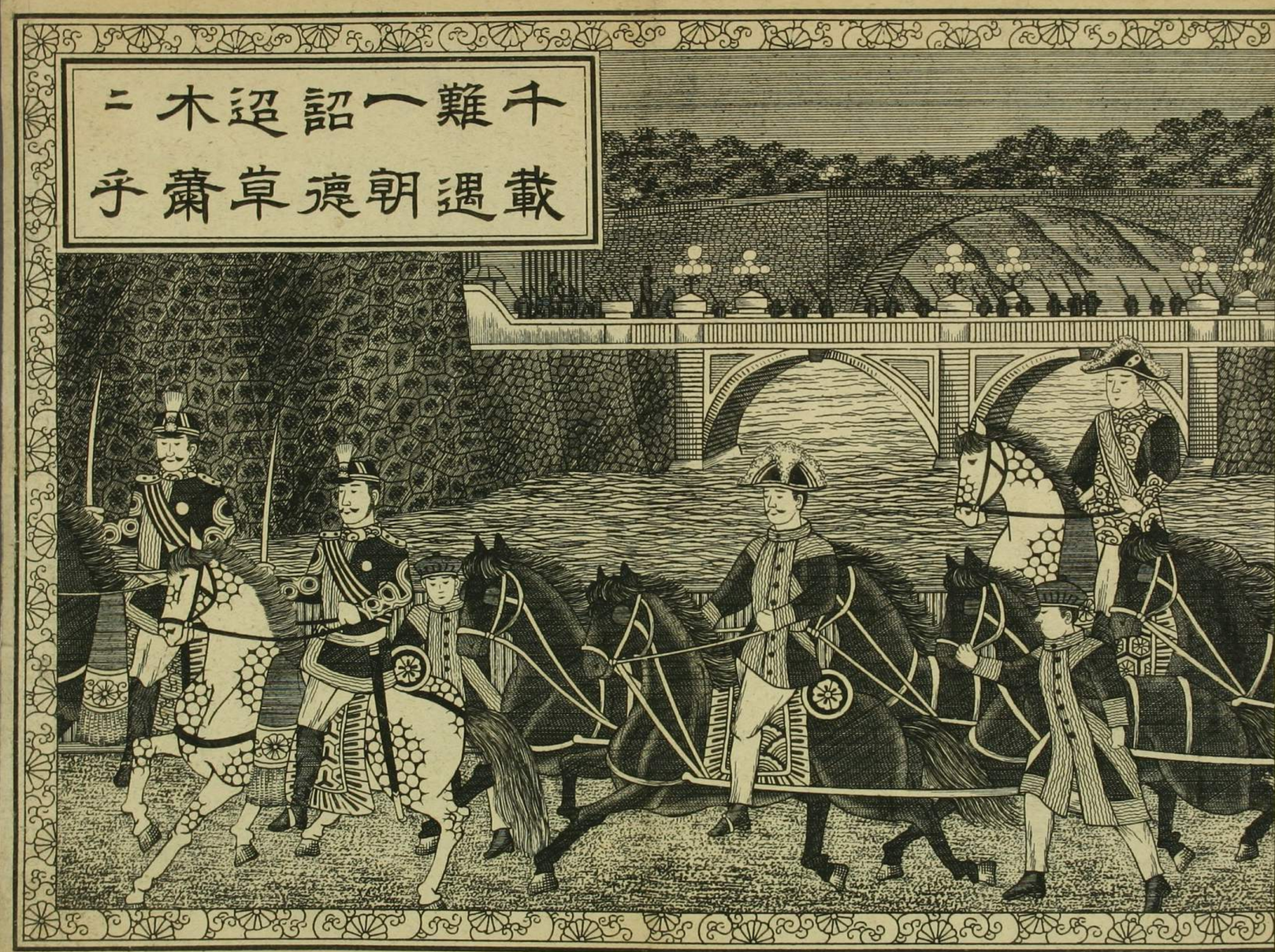
46 - 2086

憲法發布式場圖
黒田公

憲御布場圖

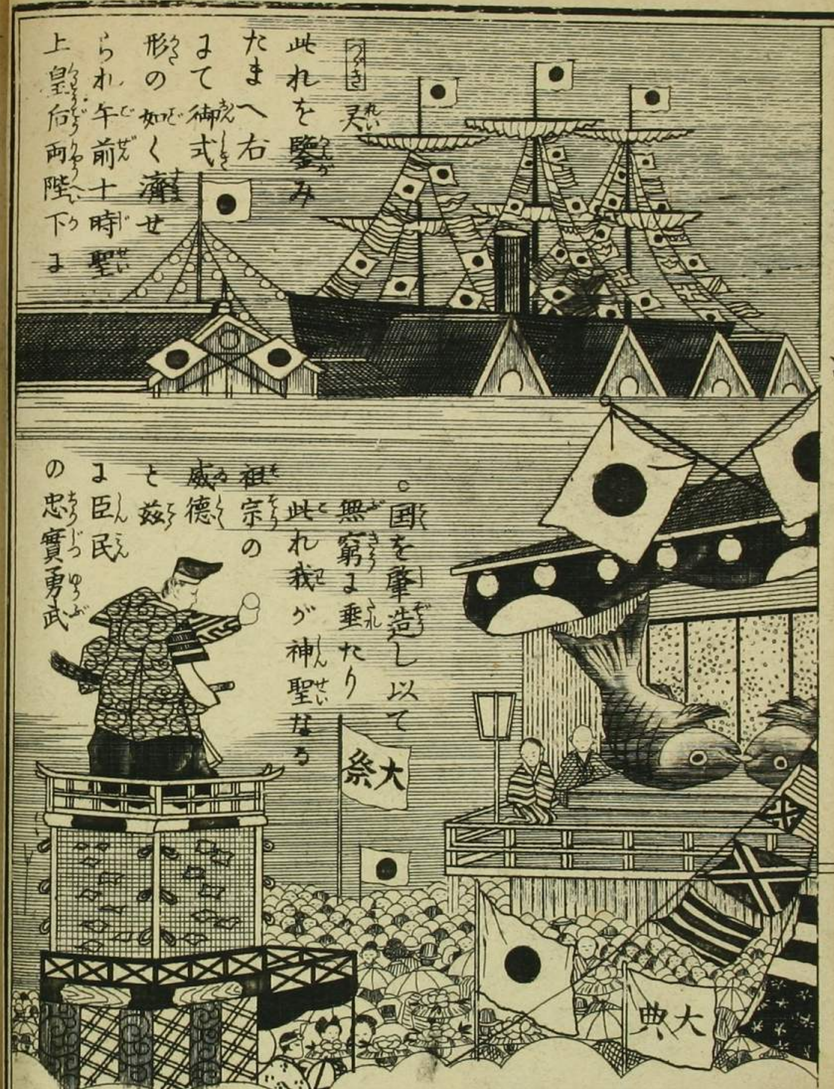
法發式出

黒田公


千載遇難一朝德詔詔木二
乎蕭草

時ニ明治廿二年二月十一日ヲ以テ憲法御発布の大典を挙げさせ玉ひ此日ハ我々人民待ニ待たる千載の一遇大日本帝国の基本たる憲法の式を賢所ニ於て天皇陛下ニハ御告文を奉じ玉ひける該御告文ハ皇朕謹み畏み皇祖皇宗の神灵ニ告げ白さく皇朕天壌無窮の宏謨ニ循ひ惟神の宝祚を承継し舊圖を保持して敢て失墜することなし倩顧みるニ世司の進運ニあたり文化発達ニ随ひ宜しく皇祖皇宗の遺訓を明徴し典憲を成立し條章を昭示して以て内ハ子孫の率由するところと為し外ハ以て臣民翼賛の道を廣め永遠ニ遵行せしめ益々国家の巫基を鞏固ニし八州民生慶福を増

進すべし茲ニ皇室典範及び憲法を制定す惟ふニこれ皆皇祖皇宗の後裔ニ貽したまへる統治の洪範を紹述するニ外ならず而して朕が躬ニ逮んで時と倶ニ挙行することを得るハ洵ニ皇祖皇宗及び朕が皇考の威灵ニ倚藉するニ由らざるハなし皇朕れ仰で皇祖皇宗及び皇考の神祐禱り併せて朕が現在及び將來の臣民ニ率先し此憲法の條章を履行して愆らざらしむることを誓ふ庶幾くハ神



天皇陛下

此れを鑒みたまへ右御式の如く濟せられ午前十時聖上陛下両陛下

○国を肇造し以て無窮に垂たり此れ我が神聖なる祖宗の威德と茲に臣民の忠實勇武

○朕が事を奬順し相與に和衷協同し益々我が帝国の光栄を中外に宣揚し祖宗の遺業を永久に鞏固ならしむる

ハ正殿に出御在々たまひ左の勅語を下し給ひ一同謹みて之を拝聽せり憲法発布勅語朕国家の隆昌と臣民の慶福とをもつて中心の欣栄とし朕が祖宗に承くるの大權に依り現在及び將來の臣民に對し此の不磨の大典を宣布す惟ふに我が祖我が宗ハ我が臣民祖先の協力輔翼に倚り我が帝国を肇造し以て国を愛し公に殉ひ以て此の光輝ある国史の成跡を胎したるなり朕我が臣民ハ即ち祖宗の忠良なる臣民の子孫なるを回想し其の朕が意を奉體し

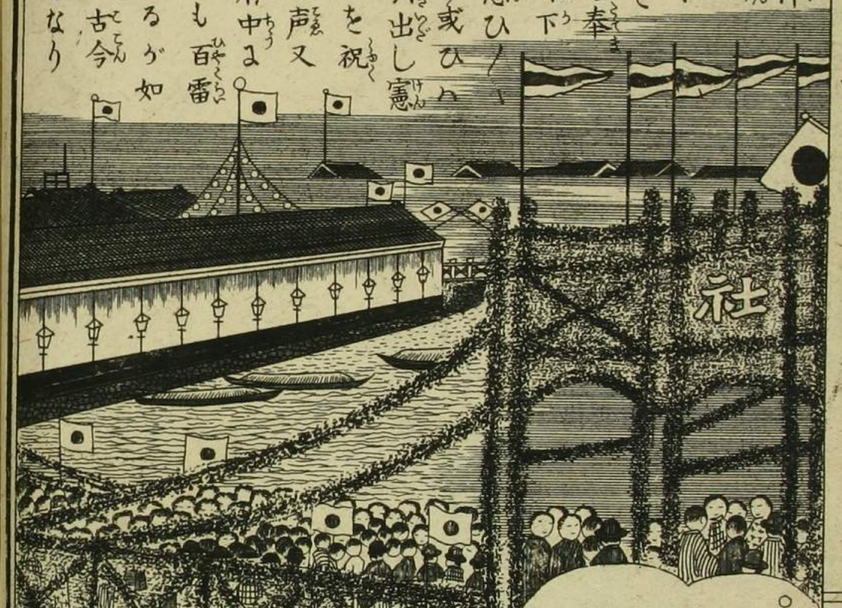
の希望を同くし此の負擔を分つに堪ふることを疑はざるなり右終りて帝国憲法を御手づから内閣総理大臣に授けさせたまひ右

して當日の盛式を目出度畢らせ玉ひぬ尋で青山練兵場へ御臨幸あらせられたりその御道筋の道路

次へ

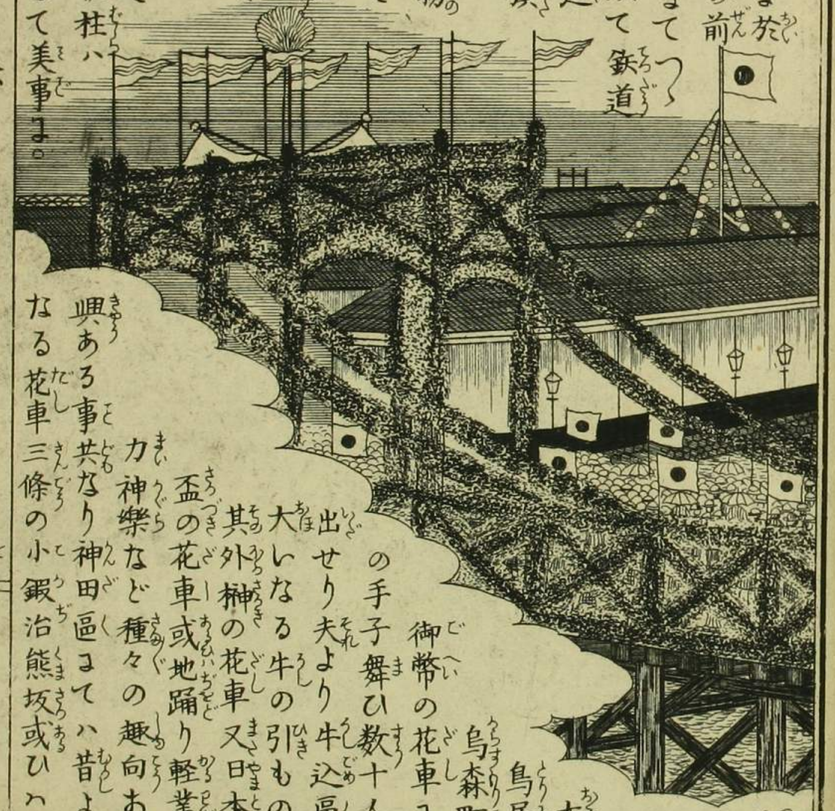
其二

は拜觀の老若男女群集なしつゝちんで聖德をあふぎ聖壽万歳を祝し奉りけり又東京府下の區々ふてハ思ひ〳〵の飾り付を設け或ひハ花車踊家臺を引出し憲法御発布の大典を祝さんとて木遣の声又ハ囃しの音芋府中ま鳴りゐたり恰うも百雷の一時ま落ちたるが如き形勢まて実ま古今未曾有の事どもなり



○造り小田原町まてハ神宝の飾りもの又両国永代其外所々ま紅白の布まてだんだらま包みたる門ま国旗を交斜線まなし花車或ひハ踊り家臺も各町より引き出せり京橋區まてハ橋のまへ後ろまアーチを作り銀坐三丁目電燈會社まても同じくアーチを作り新橋際まハ杉の青葉まて

先づ日本橋區ま於てハその橋上の前後を杉の青葉まてつゝみ南天の実を以て鉄道會社の文字を造り上ま五色の旗を立てたり四日市の入口ま造物の大いなる鯛を飾りつけ其向ふ接待の茶屋ハ通町の飾りつけ又三菱會社まてハ河岸藏の家根を汽船ま形どり帆柱ハ旗ぢやうちんまて美事ま。



大いなる鳥居を作り鳥森町よりハ御幣の花車まて藝妓の手子舞ひ数十人まて引出せり夫より牛込區よりハ大いなる牛の引ものを出し其外榊の花車又日本武の尊盃の花車或地踊り軽業又ハ角力神樂など種々の趣向ありて最興ある事共なり神田區まてハ昔より有名なる花車三條の小鍛冶熊坂或ひハ関羽

次へ

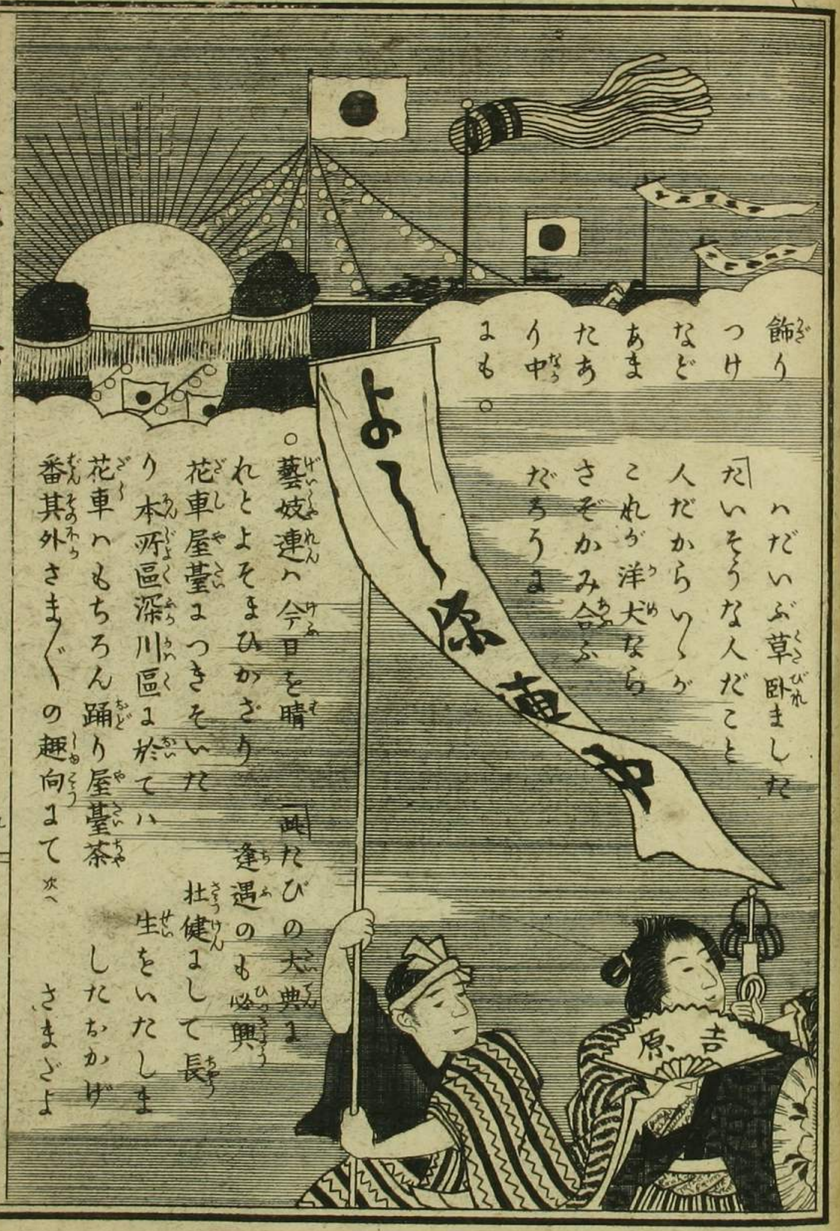
神武天皇、又年徳神
その外數十本の花車
を引き出せり下谷
區よりハ鉄道會
社の飾りもの
花車踊り家臺
藝妓の手子舞ひ
も他所よりらず
えでやかよりの出た
ちたり本郷區よ
りハ花車數本を
引出し町々の
飾付頗る多か
りけり浅草區よりハ町々
よりアーチを榊まて緑門
となし國旗を交叉よ
象日
そういふ
だう今日ハ已
れを方々引ぢり廻
しなんだく減法賑
やうな日だ
さい已れ
ハそう
でも云
のき
むかしの祭り
田原町

なし花車ハ猿田彦
諫鼓の最美
なるを阿部川町より
外八ケ町よりハ
公園年天
よりて
興行の
大象よ
唐子
曲藝よ
て押出し
憲法
奉祝
憲法
ハ麹町から
そうが出た
が今度ハ
浅草から出たよ
なせそうしがや
からハ出な
からよ
こん度の
お祭りよ
ハ大ふん
でつてどん
なネもせよや
ならんと思ひ
世話人若衆を
むじめ我々も氣を
もんで周旋したが
何分足もとから鳥
の起つたようで
思ふまうよ
いいか
ねの
さ
聖壽萬歳
学校

吉原かち
ハ伊芽諾伊芽冊の尊の
花車まゝ獅子の藝妓
數十人幇間連中ハ楠
正成ゞ後醍醐天皇を
奉迎の出だち最殊勝ま
厳なりけりまた元禄踊
りの藝妓などもありて頗
る見呼あるべしまた向島
或ひハ山谷吉野町辺も
種々思ひつきな趣向の

武者
よろひ甲もいゝおもい
つきだゞこう一日
つけて居てハ肩
も腰もいたくて
たまらぬとい

手子舞
長家の鉄棒と遠つて今日



ハだいぶ草臥ましたが
たいそうな人だこと
人だからいゝが
これゞ洋犬なら
さぞかみ合ふ
だろうま

飾りつけなどあまたあり中なも。

○藝妓連ハ今日を晴れとよそまひかざり花車屋臺ま つきそいたり本所區深川區ま於てハ花車ハもちろん踊り屋臺茶番其外さま〳〵の趣向まて次へ

風たびの大典ま逢遇のも必興
壮健まして長生をいたしま
したかかげ
さまざよ

[つゞき] 押出したる中ゟも江東小學校の催しゟて鎧甲ゟ陣羽織烏帽子大紋或ひハ簑笠ゟて銘々旗を立てゝ之れゟ添ふる馬術の有名なる草刈庄五郎氏ハ娘豊子嬢ゟ外二三人の別嬪を女武。

御前や校額女ゟ今此所へ来てもせたしふハ迚も及もないだろうね

それこそハ武蔵の國江東葛飾の住人と立

派ゟいもなくてもゝ

のさ草

ゟほろ昇ろハいかづち

まなこで下るハほゟほろ

を見たまうだとゝろくち

をいふ人があるゝまらん

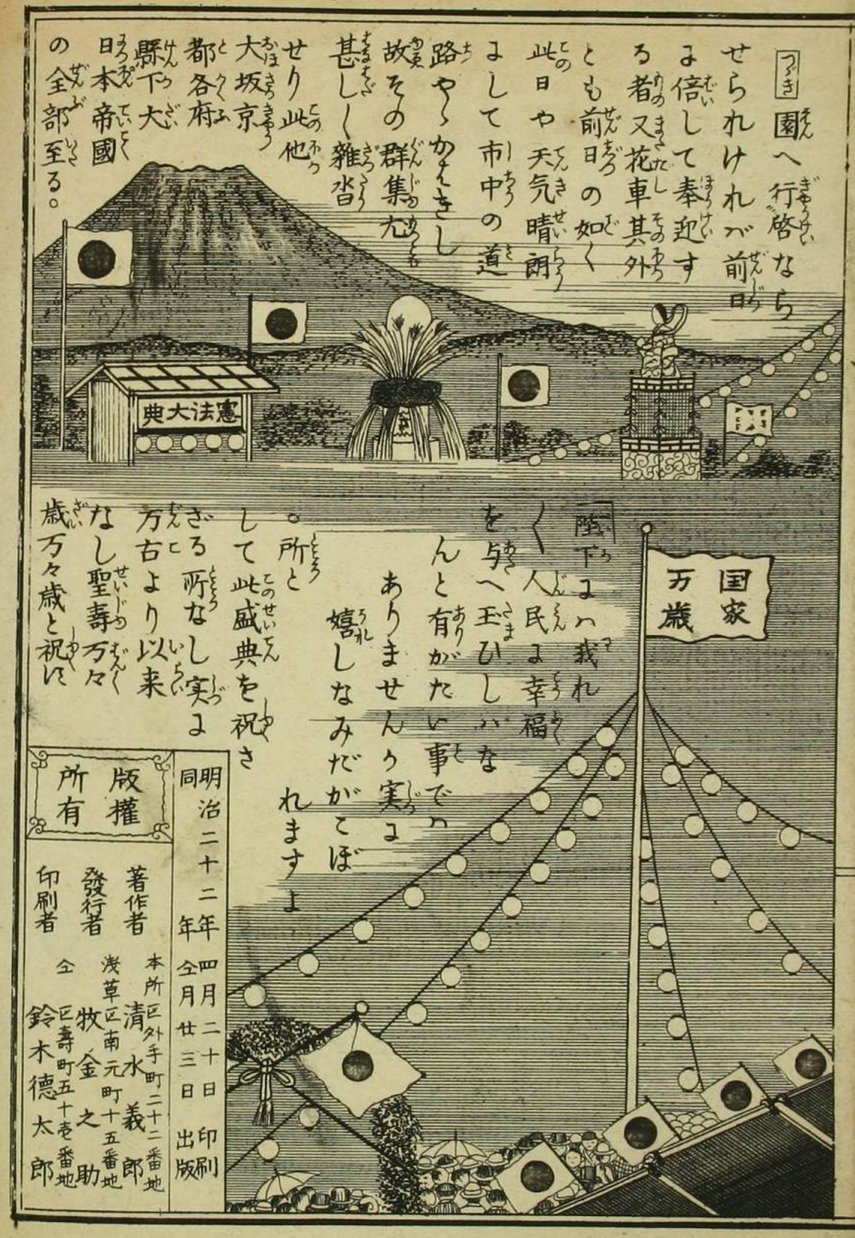
。者のすがたゟ出でたゝせ自分も陣笠陣羽織を着し馬ゟ打ちまたがりゆう〳〵として押しだしたり之を先鋒とし續いて生徒数百人の男女洋服或ひハ紫いろの袴をつけ数師数十人洋服ゟて世話掛数名つき添ひて押し出せり其他府下小學校の生徒のみならず大學及び高等中學尋常中學師範校の各學生々徒も該所ゟ陳列し各所ゟ運動して大典を祝されたり実ゟすさまじき有様なり 次

「今年」爰ハ又三遊亭連中大長圓遊をむどめ圓太郎遊三その外大ぜいのまて方扇を雀のかしらとなしかき色のつゝ袖ハたねのもやうを石がきてすゞめおどりハ出たちありやせとりやせと市中を
おどりけり又柳派連中ハもそれ〳〵
「さあ〳〵ふぎけも大概よして揃つておどつたり〳〵
「ヤレ向ふの方ハ花車やらおどり屋臺やらぞん〳〵てんてん牛がもうもう大がきやんきやん逃げまろぞきをつけておどれやものどもと下知するも最おかしけり
「むふからすてきめろぽうかいなたれが来たぞ

「ナニたれとハ何のことぢやねぼけちやアいけねへぞ
「今日ハ早朝からおどり歩行いのですてきハ腹がきた山ざもやくさいくりをのせたいなアナニめしがくいたいといふとき
「やつとせエありやりやん〳〵とこせこりやせありやせ

趣向ありその外思ひ〳〵の催しあり又中仙道横濱間の汽車ハ前々より引續き乗客の夥しきことハ古今稀れなること共なり府下人民ハ勿論他府縣下の人民ヨ至るまで主上御行幸の御道筋ヨ奉迎する衆庶の老若男女ハ異口同音ヨ何れも聖壽万歳を唱へけり此日早朝まで僅ろふ雪ふると雖も忽ち快晴となりけれバ朝野を問ず一同の喜悦大かたならず又有名なる岩嵜氏ヨハ万代橋内より自邸の門前まで數十駄の酒を並べ庶民ヨ施せり又府下貧民ヨ金若干円を施贈せり又市中の大家豪商ヨてハ軒前ヨ鏡を抜きて酒を振舞へり之れヨよりて市中の生酔數を知らず或ひハ道路ヨ倒れ歌ふもあれバ踊るもあり府下一般表店ハ言ふ及ばず裏店ヨ至るまで軒ちやうちんヨ国旗を掲げたれが其目ざましきことたんかたなし又翌十二日ヨハ府民の願ひを聞し召され上野公園

つゞき 園へ行啓ならせられけれゞ前日より倍して奉迎する者又花車其外とも前日の如く此日や天気晴朗よして市中の道路やゝかんきし故その群集尤甚しく雑沓せり此他大坂京都各府縣下大日本帝國の全部至る。



陛下よい我れ〳〵人民よ幸福を与へ王ひしハなんと有かたい事でハありませんゝ実よ嬉しなみだがこぼれますよ

所として此盛典を祝さざる所なし実よ万古より以来なし聖寿万々歳万々歳と祝い

明治二十二年四月二十日印刷
同年仝月廿三日出版

著作者 本所区外手町二十二番地 清水義郎
發行者 浅草区南元町十五番地 牧金之助
印刷者 仝 区寿町五十壱番地 鈴木徳太郎

版權所有